

## 【足立区地域自立支援協議会はたらく部会】会議概要

会 議 名	令和元年度 第2回 【足立区地域自立支援協議会はたらく部会】
事 務 局	福祉部 障がい福祉センター
開催年月日	令和元年9月4日（水）
開催時間	午後3時00分 ～ 午後5時00分
開催場所	障がい福祉センター 研修室2
出席者	橋本部会長、酒井委員、金泉委員、岡本委員、山口委員、松村委員、木村委員、朝倉委員、杉岡委員、高橋委員、江連委員
欠席者	川俣委員、
会議次第	<p>1 開 会 障がい福祉センター所長挨拶</p> <p>議 事 （1）部会長挨拶 （2）協議 ① 課題検討「余暇の過ごし方について」 ② その他・事務連絡</p> <p>3 事務連絡 （1）今後の開催日程について 第3回 10月8日（火） 第4回 11月21日（木） ※ 時 間 ：午後3時～5時 場所：障がい福祉センター （2）その他</p>
資 料	<p>資料1 次第 資料2 席次 資料3 気まぐれ八百屋だんだん子ども食堂（委員提供資料） 資料4 9月4日はたらく部会共有アンケート</p>
そ の 他	

## 様式第2号（第3条関係）

（協議経過）

○橋本部部长 みなさん、こんにちは。部会長の橋本です。このはたらく部会は今年度2回目ということで、テーマは、前回は、企業支援、よい就労、企業の好事例をそれぞれの立場から共有しまして、今回は、余暇の過ごし方についての内容を取り上げますが、その背景としましては、去年、情報共有する中で、企業側の理解ですとか、私たちがどのように企業とコミュニケーション、対話すればよいかということがテーマとしてあって、まずは、企業さんの取り組みでよい事例を共有して行って、それをどのように広げていけばよいかという切り口から話が広がって行って、企業表彰ですとか、時代の流れも、企業表彰の機運があがってきている背景もあり、そのあたりを前回共有させていただきました。

今回は、余暇の過ごし方についてなのですが、これについては、障がいのある方が就労した後に、私たち就労支援者は、狭義での就労支援としては、企業への橋渡しですとか、就職までのサポートとか、定着支援がありますけれども、地域ではたらし続けることを支えていくことが、はたらく部会の大きなテーマであるとの共通認識ではあります。はたらし続けることを支えるためには、障がいあるなしにかかわらず、はたらし続けるための生活面や、はたらし続けていくためには、余暇の充実という要素が必要になってきますので、障がいのある方のそれぞれの特性に応じた余暇の困りごとについて去年、話が出てきましたので、今年は、余暇の過ごし方についての課題をみなさんで検討していければというところで、情報発信させていただきました。エクセルのシートにはそれぞれの立場から余暇の情報を明らかにしていただいて

います。添付資料にありますエクセル資料に沿って、それぞれの考え方、内容について細かく説明していただいて、持っている情報を皆さんに共有させていただく時間としたいと思います。

その上で、今後の流れとしましては、第3回目が10月にありますので、このときには第1回、第2回の情報の中で集約できたものについてポイントを踏まえまして、情報整理して第4回につなげていく流れと思っています。ここまでの流れで、質問等がありますでしょうか。

（質問なし）

○橋本部部长 それでは、エクセルシートをご覧ください。こちらは事前のアンケートについて回答があったものを掲載させていただいています。それぞれのものを見ながら進められれば、と思います。

まず、最初に、私の方から説明させていただきたい情報があります。北区のヴィの「ながや」の取り組み、ご存じの方、行かれたことがある方、いますでしょうか。

○事務局 就労支援のネットワーク会にて見学会を開催しました。

○橋本部部长 十条の店舗を改装してレストランがあって、2階でセミナーができるようになっているようです。

○事務局 そちらの十条は、「まちなか」の方ですね。「ながや」は都営住宅の中で、高齢化率の高い団地、桐ヶ丘団地の中の一画です。高齢の方の国の事業のモデルとして、地域の高齢者の支援の方と、ヴィさんとが一緒になって、地域の社協さん、包括さんや、高齢の法人とで、どんな社会資源が必要か検討した中で、やはり高齢者が集える場所が必要だ、となって、それを団地の一画に作った。そして、そういうところに障がいのある方がどういう風にコミ

ットできるか考えたときに、就労継続B型のレストランを作って、サロンとして使ってもらうようになったそうです。となりの、そば屋さんの改装のところには、こあがり、舞台があって、発表会ができる場所もありました。地域のたまり場を、就労継続B型が運営している事例と思います。

○橋本部長 ありがとうございます。

○事務局 昨年のはたらく部会での配布資料の中で取り上げています。

○橋本部長 全国で展開しているコミュニティカフェの取り組み事例で聞いた話なのですが、メール等でも資料を見させていただき、コミュニティカフェでの事例発表会のイベントにも参加させてもらっています。地域での町おこしだったりとか、人がまとまれるコミュニティの場所であったりとか、いろいろ目的があるけれども、そこは、障がい、高齢の方も関係なく集まって地域の中で拠点を作っていくという共通点があります。はたらく部会の中でも共通テーマになるのかなあと。かなり広がっているものとして、コミュニティカフェという取り組みを感じています。おしゃれなところや本格的な料理を出しているところもありました。

次にウェルズズのフォローアップの会は、私たちの事業所の取り組みですけれども、3か月に1回レストランを借り切って、食事会をしているのですけれども、毎回30から40人の就労した障がいのある方が集まって食べて、飲んで、話してしていますね。最初は知的障がいの方と、精神障がいの方と混じってやっていたのですけれども、精神の方は自分のことを話したい希望が多くて、今年度から知的が集まる会、精神が集まる会を、わけて開催しています。やはり同じ悩みを共有でき、ピアサポート

的ななかかわりが、自然発生的にできあがってきたので、分けてやったほうが、リラックスできてきたので、余暇としては充実していくようになりました。定期的なうちの法人としては開催しています。

次に、今年の3月から高齢者施設の方と障がい者施設の私たちとで、地域のどんなニーズがあるかっていうことを確認するための勉強会を自主的にしておりまして、うちの事業所に集まって、開催日、内容は書いてありますが、高齢分野での今の困りごと、障がいの困りごとを共有しまして、今は、特に制度の勉強をしています。地域リハビリテーションですとか、共生サービス、地域拠点の話をしています。

高齢者では健康維持が大切ですし、障がいのある方にとっても健康維持するための拠点づくりが大切ですし、そこにPT、OT等の専門家が入っていくことも大切ですし、地域単位での拠点レベルのものができて、徐々に、いろんな専門家が自然な形で入って多職種連携していければ、と思います。月1回やっています、どなたでも参加できますので、興味があればご連絡いただければ日程などお知らせしますので、是非、いらしていただければと思います。以上ですが。質問はありますか。

○江連委員 包括の参加はありますか。

○橋本部長 包括はまだ。特養の方を中心に来てもらっています。特養の話では、人材確保については課題になっていて、どういう人材を集めていくかは課題になっていますし、共生型サービスについても長い視点では興味があって、障がいとの連携も視野に入れている、との話になっています。

他いかがでしょうか。こんな流れですすめていければと思います。木村委員お願い

します。

○木村委員 はたらく上で、余暇活動の大切さを感じています。ご本人が話す場が欲しいとのご意見もありますので、そういうところは作ってほしいと思います。

○橋本部会長 話す場所を作っている、取り組みはありますか。

広島の事例で、研究報告で、特別支援学校の先生さんが中心になって作った就労支援協会があって、卒業した生徒さんが、後輩の学生に自分の仕事を話すという取り組みをされています。話すことでキャリアをあげていく、学生さんは、はたらくイメージをあげていくという仕組みを、特別支援学校とか労働系の機関が連携しながらやっているという事例だったので、アウトプットする機会は余暇活動としても重要なのかなと、この研究報告をみて思いました。サロンづくりの機能として必要と思います。学生さんの仕組みは、また先生にもお伺いできればと思います。ありがとうございます。金泉委員お願いします。

○金泉委員 東京都障がい者スポーツセンターでは、コスモススイミングクラブに月7回不定期ですが通っています。どうしてもコースがとれないときや、大会前の練習では、夢の島に行きます。やはり自閉の方が多いですけれども、楽しく通っています。少しずつひとりで通えるように練習して、今は、千葉の国際水泳場でも全部ひとりで通えるようになっています。

日曜教室は、うちの長男は卒業してすぐに1年程通いましたが、希望のスポーツグループに入れず、1年でやめたので詳しくはわからないのですが、グランファミリア、親の会の副会長から活動を聞いたので書かせていただきました。詳しくはわからないので、以上です。

○橋本部会長 質問とかありますでしょうか。プールが好きな人が多いですね。

○金泉委員 自閉の方が本当に多いですね。うちは違いますが、たまたま好きです。クラスもいろいろあって、泳ぎをマスターしたい方もいれば、泳ぐというよりつかってほしいという方もいる、いろんなグループがありますね。

江連委員 千住や綾瀬のプールに行くと、お母さんが連れて来られて入られているのはよくみかけます。浮いて気持ちよいのでしょうかね。うちは療育でプール水泳の指導の先生も来ますが、水好きな方が多いですね。障がい者スポーツセンターについては、障がい者計画にも登録数が目標にあって、また、オリンピックの開催に向けて、障がいスポーツの普及啓発にも動いていきたいです。

○橋本部会長 ありがとうございます。葛飾ろの杉岡委員いかがでしょうか。

○杉岡委員 うちの学校の生徒ですと、やはり卒業した後、学校に来て集まって話すとか、聴覚障がいがありますので、特別な場を設けるよりも、勝手に集まっているイメージです。文化祭、学校の大会のときに集まって来るのですけれど、大会や文化祭そっちのけで、卒業生どうし話している。そういう状況もあるのですが、コミュニケーションの点でも、気兼ねなく話せる仲間は学校の仲間くらいしかいないので、会社にいっても、どうしてもコミュニケーションで苦勞しているようです。

聴覚障がいについては、それぞれのコミュニティがあり、それぞれ学生のものとか、スポーツに関しても聴覚障がいの団体に入っている者もいます。が正直、心配なのは、そういうのに、入っていけない卒業生が心配で、十分ニーズをつかめないと感

じます。

今日、生徒と話していて感じたのが、「自分たちはどこにでも行ける」と思っているし、学校では「聞こえ以外は障がない」との環境で育てていますが、社会に出るとバリアが出るとの話もあります。例えば、遊園地に行くと、「聞こえない人はご遠慮ください」と、実際には聴力的に音もわかるのですが、聴覚障がいがあると一律に言われてしまう場面もあり、多少は聞こえても全く聞こえないと思われてしまう、と生徒からそういう話があり、はっとさせられました。

東京都障がい者スポーツセンターですけれども、やはりスポーツ、部活動を中高やってきた人たちは、聴覚障がいのクラブで続けている人もいます。ちょっと課題になっているのが、スポーツを頑張りすぎて休み明け仕事に行けないというケースが、今年度2件程ありました。やはり聴覚障がいコミュニティの中では居心地がよいのですよね。手話で話ができ、会社よりも居心地がよいので、バランスをとるのが難しい、そういうことがあるので、もうちょっと前に相談してほしかったかなと感じています。

○山口委員 城南地域センターの山口です。グループホームの利用者さんでもフットサルをやっている方が結構多く、大きな大会の後には、燃え尽きから、からだの疲れがあります。我々の配慮できることとしては、有給休暇を月火に先手をうって取るようにします。あとは、週末土日休みの方が多くて、両方からだを動かす活動はちょっと控えましょうね、と。対策をとらないと、月曜日に「仕事に行かない」となってしまう、世話人さんが困ってしまう事例もよくありますね。いい側面と反動の側面

について、支援者は、両方を想定して対応しないといけないと思っています。

○橋本部長 休みの過ごし方で仕事がいまいかなくなることは多いですね。

○杉岡委員 聴覚障がい者に関しては、生活支援については、あまり支援がつかないので。親御さんがいるうちはよいのですが、正直自分でやっていかなくてはいけない、となったときの調整はグループホームさんよりも難しい面があります。

○橋本部長 朝倉委員をお願いします。

○朝倉委員 2枚目の9番、10番を報告させていただきます。学校の取り組みとしては、レッツエンジョイという普通科の余暇活動ですけれども、土日、年間4回実施しています。例年50名前後の卒業生が参加をして、スポーツ、ダンス、歌、近況報告をしたり、工作活動をしたり、ずっと本校で取り組んでいますけれども楽しい催しの一つです。

職能開発科の方も、今までは、ボランティア養成講座をやってきましたが、だんだんニーズが、変わってきてまして、卒業生を直に対象とした、自分の仕事の様子を共有し合う、来年度からは卒業生向けの本人講座、普通科のレクリエーション的なものよりも、講座的な形のものを作ろうと、今、計画しているところです。

スポーツクラブは、あらゆる種目で、区がやっていたり、特別支援学校の教員が中心にやっていたり、中学校の教員がやっていたり、本当にいろいろな種類があります。

課題と感じているのは、杉岡委員もおっしゃっていましたが、レッツエンジョイも、毎年、卒業生がいても、毎年50人については、新しい人が入ると前からの人はいろんな事情で、毎年申し込まな

くなって、急激に増えることがない。卒業生の2割、1割強位の方が、来て参加して楽しむのですが、残りの方たちはどういう余暇活動をしているのかと考えると、こういったスポーツや活動をしているグループ、卒業生の割合は多くはない。活動そのものは、活発で、全国大会に出るなど、実績が上がっていますし、頑張っている印象を持つのですが、割合としてはそんなに多くはない。余暇活動の取り組みは、どんどん増えても、実際どれくらいの方が利用するのか、ということが、課題としてあると私は思います。

地域のクラブに参加している方も、小さな頃から保護者の方が、うちの子はサッカーやりたいと言って、あそこがいいのがあるよと申し込む、そういう方は、どんどん自分でやっていけるのですが、「何をやっていいかわからない」というの方が、実は割合として多い気がします。

この春、卒業して就労した卒業生について、会社からやる気がないと連絡が来て、先日、話に行ったのですが、聞いてみても、辞めたいということもないけれども、意欲もない。夏休みはどうしていたか聞くと、家族と旅行行ったと言う。でも、その家族の旅行の計画なり、お金を出すところには本人は参加していない。親御さんが全部計画して、お金を出して、そこでお土産2000円買っただけ。このように彼の生活を聞いていくと、本人はお金をほとんど使っていない。給料が10万円入ると、そのまま親御さんが貯金して、本人は10万円どうなっているか、わかっていない。貯金は確実に増えていきますが。

すぐに、家族と話をし、まず、お金の使い方を考えていきましょう、となりました。10万円のその中で、本人の楽しめる

お金を準備して、「何やっていいかわからない」と言うのですが、「最近野球に興味を持っている」というので、まず父さんに東京ドームの野球に連れて行ってもらい、楽しみを覚えてもらって、そのお金を出していくようにしましょう、としていきました。そうでないと、彼にとっては、何のために働いているかわからなくなっちゃう。割合としてはそういう方が多いのではないかと思います。

こういう風にグループでの参加がなくても、鉄道が好きの方等は、良いはたらき方ができている。わかりやすい例ですけれど、今までは、ここまでだったけど、今度働いてもっとお金使って、もっと遠くとか、新しい線ができたから、そこに行こうとか、目標が明確で、そのために頑張るっていう、とてもよいサイクルできている。特別な催しでなくても、どのようなサイクルを日常に作っていくか、どう仕事と絡めていくかが大切で、楽しんでそれが仕事と結びついていくことが、はたらきがいになるのではないかと思います。

○橋本部会長 具体的な事例や、同じような意見がありますか。

○山口委員 余暇は外に出るだけでなく、個別、個別でよいと感じています。土日一步も外に出ない利用者さんいますけれど、DVDでのドラマを見て、楽しみに過ごすことも、その方に合った余暇なのですよ。いろいろな提案をしていきますけど、無理強いせずに、個別特性に応じた余暇支援を、私たちは、考えなくてはいけなかなと思います。

全くない方へのアプローチは、難しいと感じています。水族館、映画行きましょうと言っても、「いいです、いいです」「興味がないです」、「生活リズムを崩したく

ないです」、という方もいます。

○橋本部長 生活サイクルをどうするか、しごとと余暇のバランス、サイクルというのも重要なキーワードと思います。DVDの好きな方が、定着支援に来られていますけれども、金曜日の夜中、必ずテレビドラマがみたいという場合、グループホームのルールで、その時間はいけませんとなると、これまでのご本人が大切にしていたリズムや、優先順位の中では困ってしまいます。家族の要望もあります。仕組みがあっても、ピンポイントでの調整や、本人に合っているところへのアプローチですとか、深いところへの支援力が、余暇の分野では、必要になってくるなあと感じます。

○高橋委員 4月に社会福祉協議会保護雇用担当課に着任しました。どうぞよろしくお願ひ致します。私の方から、いくつか挙げさせていただいているのですけれども、社会福祉協議会の地域福祉課というサロンや居場所を管轄している部署がございまして、その職員から口頭で聞いて来たものをのせました。関心のあるものは、お声かけいただければ、詳細をお調べして、お伝えできればなあと思っています。

余暇の過ごし方というところでもありますけれども、保護雇用担当課では現在26名の知的障がいの方を直接雇用しています。愛の手帳3度の方が16名、4度の方が10名となっていますけれども、何人かの職員さんに、余暇の過ごし方について聞いてみました。全般的に多いのは、親族、家族と一緒に過ごす、外出する、そこで自分の好きなものを買う方が、一番多いように思います。逆に在職平均18年で平均45歳の年齢で、親御さんも高齢になっていて、ひとりでの外出が増えている実態もあります。ひとりでひたすら都バスに乗っ

て、お金をかけずに遠くまで行って、自分のお好きなお蕎麦を食べに行くとか、それから、本当にご自宅のまわりだけで、とにかく一番楽しみなのが、朝5時半にコンビニに行ってスポーツ新聞で、前日の野球の記事を読むこと、という方もいて、いろんな楽しみ方があるようです。ただ、平均年齢45歳で、月曜日から金曜日までフルで仕事すると、土日に外に出る気にならない方も出てきて、自宅でテレビ等を見て過ごす方もだいぶ多くなっています。

反省点としては、社会福祉協議会の同じ組織の中で、サロンや居場所づくりを管轄しているところがありますので、もっと連携して、情報提供とか積極的に関わっていただけらなあと感じています。

○橋本部長 何かご質問とかありますでしょうか。資料にサッカーチームありますが、やはりスポーツが多いですかね。

○高橋委員 30代の女性の方、スポーツクラブにずっと長い間通っていて、5月位に水泳大会に参加して来た、パラリンピックとは別の枠だそうですが、そこで金メダルとって、自分の自信になったという話もありました。それぞれいろんな活動されているなと感じます。

○橋本部長 いろんな存じ上げない活動の情報もあったので、あらためて相談があったときに、こんな選択肢がありますよ、と示せばよいなと思いました。そのあたりも情報共有していきましょう。松村委員お願いします。

○松村委員 皆様の意見を聞かせていただいて、地域活動支援センターI型をやっていて、プログラムがあり、調理、ヨガ、スポーツなどが余暇の一つとしてあります。ただ、所属をこえた形で、地域で集まるサロンというようなところは他区にないかな

あと調べ、江戸川等にも聞いてみましたけれど、結果、ありませんでした。

余暇ということで、どこに焦点あてたらよいか考えていまして、地活のふれんどりのプログラムにも余暇活動の要素はありますが、はたらいっている障がいを持つ方が参加されているかと言うと少ない。圧倒的に地活のみを利用されている方が多いです。はたらいっている方にこの間、何人かに定着支援で伺っているとき「余暇って何しています」と聞いたら、「家で寝ています」と。杉岡委員からも、「まわりに理解されていない」、「まわりからバリアを感じている」という話があったと思うのですが、精神の方も、それが大きくて、自分の状況を理解している人がまわりにいるかどうか、受け入れられる、気持ちのゆとりや、安心感につながるのですよね。余暇は自発的なものですので。

よく医師が、「障がいを持った方がはたらくのは兼業と一緒に、障がいを持ってさらに仕事を持つ、というのは、兼業の方が仕事の後に仕事をするダブルワークをする位のものだ」と話されていました。兼業のようなものということ、甘えとかでなく、会社の方にも、理解していただく。我々の中でも、理解し合っているか難しいところで、まず、そういったことを共感してもらえる方がいるかどうか、大きいと思います。自発的に余暇を楽しめる方にも段階があって、まずは、会社になれる、会社の中での問題がある程度が解決できる、そこで会社の中で自分が理解される、無理のないはたらき方ができるようになる。しばらくして、その次ようやく余暇に目が向く。そうした段階に応じて、サロンがあると非常によいのではと思います。

毎年OG、OBにきていただいて、話を聞

くのですけど「恩返しで、話をします」としっかり、話していただきます。アウトプット、話をすることが、すごくだいじ。話をしていることを、自分で聞いて、それで自分も整理ができますし、人との共感で、結果的には、自分自身にも自覚ができる場にもなるかなあとと思います。お互いを自覚できる場が、もし、サロンにそういうものがあれば、そこからさらにプログラムだとか、次のスポーツ、カルチャーへちょっと行ってみようかなあと、その力を生み出せる場になる気がします。

○橋本部長 いかがでしょうか。余暇はリラックスというイメージもありますが、エネルギーがいるという視点も必要ですね。余暇にいかない段階のケアも必要です。

○松村委員 職場の部分が解消できないと、カラオケをしても、そのドアを開けたら現実が待っている、余暇が余暇にならない、ストレスになることもあります。私たちと一緒にです。はたらきはじめのときは、ちょっと愚痴が言える場が、はたらく障がい持たれた方には、だいじな場所なのだろうなと思います。

○橋本部長 ありがとうございます。つづきまして岡本委員お願いします。

○岡本委員 余暇の過ごし方を、あだちの里で、はたらくという分野で考えると、A型が3か所あり全体で30人雇っています。他には、定着支援の関わりと、あとは、古くからで言うと、知的デイサービスという形で、20年、就労がらみの関わりをしている人たちがいます。

就労A型の担当者に、余暇の過ごし方についてヒアリング、聞いてきましたが、それぞれそれなりに過ごしているという現状があるようです。最低賃金で月10万円入

ると、それをまるまる、人によっては、こづかいに全部つかっている人もいて、結構、お金のまわりがよい感じは認識しています。組織立って、お金の使い方とか、A型の中で、自立講座での学習もしていますが、実際にA型の人に余暇活動を組織的に支援する形はとってはいません。自主的ないろいろなかたちで、ひとりでいたり、親御さんと過ごしたり、A型の場合だと定着の対象でないので、A型の事業の中で支援していく形です。

就労定着自体は事業的には1年経っていないのですが、月1回集まって、前半は講座、後半は余暇活動的な活動もやっています。ダンスであったり、カラオケであったり。月1回ということで、コミュニケーション、話す場、だべり場、そういうものを求めているということを知りました。そうは言っても、自分で情報をとって自分で行動できる人は、知的障がいの特性では軽度の人なので、支援が必要な人とそうでない人の差は、余暇の部分でより出て来るといふことも感じます。

はたらいっている人の場合、平日が休みのはたらき方の人もいて、いずれデイサービスを平日に利用して休日に勤務という、デイサービスの利用の仕方も、そういうものもあるかとは思いますが。余暇支援としての使われ方も、いろいろな社会資源として考えていければと思います。

A型の人のお休みの余暇活動では、移動支援も使っている人もいるし、さほど使わない人もいます。人によっては足りないという方もいますが、それなりに間に合っているのか、間に合せているのかわからないが不満は多くは聞きません。お金の部分では、愛の手帳の4度の手当の部分も、足立区も支給されましたが、その効き目がど

れほどあるかはわからないけれども、お金の使い方、余暇に関わってくるのではと思います。

○橋本部長 月に1回、定着支援で来てもらって、ダンスとかもされているんですね。就労定着事業としてですか。

○岡本委員 事業として、午前中はグループワークやって、自立講座「はたらくこと」をやって、午後はレク、余暇を、1日でやっています。

○橋本委員 自主グループが自然発生的にできてきているお話もありましたが活動の種類は。

○岡本委員 3人組みみたいな感じで、話が合う人で、みんなでディズニーランドに行く等、それなりに活発になっているようです。それはそれでリスクもありますが、稼いで、使い方を覚える経験でもあるし、そういう人もいます。人によっては、お休みの日に、昼からお酒をのみはじめちゃうグループホームの事例もあり、そういう方もいます。

○橋本部長 ありがとうございます。酒井委員お願いします。

○酒井委員 私共の法人から就職された方は、趣味を持っている方が多いですね。また、同年代との友人関係を、就職してからも連絡取り合う等、維持している人が比較的に多いです。趣味は多岐にわたって、ゲーム、釣りだとか、旅行に行く方だとか、パラスポーツのチーム・団体を作って参加している方も比較的多くいます。就職されている方の集まりは年1回やっていますが、毎年、毎年、参加する数、少なくなっているのも、また新たな取り組みを考えなくてはいけないかなと思っているところです。来る方は普段の様子がわかるのですが、来ない方は把握できません。生活が

みだれていたり、酒浸りだったりします。どちらかという、今日のテーマとズレますが、余暇活動の充実というより、生活面の課題が多く見受けられるのです。就職してからのお金の遣い方も、給料をそのまま使っちゃう方もいらっしゃいます。最近、ひとり親家庭の方も増えていて、働いたことで、生活時間がずれて、食生活がかわって、外食が多くなって、お弁当が多くなって、食生活がみだれてしまうこともあります。また、以前は病院に一緒に行くことができていたが、生活時間がずれて、病院に親御さんついていけないという事例も散見されました。余暇については充実している方は多いのですが、生活面の課題が顕著に出て来るケースが増えてきています。

○橋本部長 ありがとうございます。アプローチは食生活、金銭管理についてどのようにされていますか。

○酒井委員 まずは家庭との情報共有をします。実際に生活時間がずれている方もいれば、たまたまタイミングが合わない方もいます。仕事のある日の昼食代に3000円～4000円かけているケースもありましたが、それをお母さんが知らなくて、お金がなくなっていくことをよくよく調べてわかったということもありました。会社内で、昼食を一緒に取る程仲良い方がおらず、ひとりで外に出て食べていた、お金について、ご家庭と話し合っただけ気づけた方もいます。

○橋本部長 勉強会をしても、健康、食生活について、高齢でも障がい分野でもお子さんの部分でも、キーワードになってくると思うのですね。その事例、資料もいただいていますので、山口委員、説明をお願いします。

○山口委員 子ども食堂のご紹介をしたいと思います。添付資料を配布させていただきました。余談ですが、この食堂を知ったきっかけですが、私は、グループホームのサービス管理責任者をしていますが、グループホームには4名の方いらして、4名全員、一般企業やB型、もう休むことなくやってくる、仕事とグループホームの行き帰りについて安心しているグループホームではありましたが、その支援員から、「楽しみってものはないのかな」ということで、「こども食堂を支援員が知っているのだけど、行って見たらどうか」というのがきっかけでした。支援員と障がい者いっしょに行ったのが、今までにない世界で、寄席があったとか、「いろんな人と話せたよ」と。それがとても楽しくて、いつも土日に布団の上で寝ている利用者さん、私たちが疲れているのもあるのかな、とそのまま1年過ごして来たのですが、誘って見たら、本人が思いのほか気に入って、話題が増えたという状況です。

ホームページやインターネットで資料引用しましたが、居酒屋さんの店舗を利用した食堂みたいです。こども食堂は毎週木曜開催、それ以外の日も毎日何かしらの講座、英会話、手話サークル、三味線、ほぼ毎日催し物をやっているようです。お金も、ワンコインなので、利用者さんへの負担もそれ程多くないので、引き続き利用者も行っているようです。

最初のご挨拶程度に生活支援員が行っていましたが、私たちの狙いとしても利用者さんのみで過ごせる場所はやはり必要かなと。我々支援員が付き添える限界があるので、一人で過ごせる場所は必要です。あと地域で、住んでいる地域で、ほっとできる、知り合いができる場というところがだ

いじです。支援者だけの支援では足りなくなる現状があります。近所の方にグループホームを知ってもらいきっかけにもなっていますし、何かのとき、有事のときにお力をかしてくれ、お祭りの参加にもつながると、地域住民との地域交流のきっかけにもなります。

111名のグループホーム利用者の支援をしていると、なかなか個別に合わせた余暇支援は、まだまだできていません。移動支援を使う方、おひとりで余暇を過ごせる方もいれば、個室で何もできていない方もいます。取り掛かりとして地域で、ひとりで過ごせる場所の機会の提供、提案というところは引き続きこれからもしていきたいと考えています。

○橋本部長 ありがとうございます。資料もご準備くださっていますが、こども食堂の運営母体としては社会福祉協議会と連携しながらでしょうか。

○山口委員 社協さんとの協力によると資料に書いてあります。やはり運営にあたっての苦労はあるのかなとも、資料から読み取れますが。ただ、こういった、こども食堂の立ち上げをやりたい、との声はあるようです。そういったことについて社協も連携しながら、紹介ですとか、取り組み方を発信しているのも、非常によいのかなと思います。各区でいろんな取り組みがあるでしょうけれども、地域で、障がいに関わらず、子育て世代、子どもさん自身、いろんな方がまざっている場所、とっても相互に貴重な経験拡大になるのかなと思います。利用者さんでもお世話をやいていることで、自分の役割を感じておられて、グループホームでない意外な一面、子供食堂のお子さんとは接すると、大丈夫と手を差し伸べるような面、が見られることがあります。

○江連委員 足立区でも、各地でこども食堂は、民生委員、児童委員がはじめるところが多くなっています。現状は、こども、高齢者がほとんどなので、その中でも地域、障がいの方も含めた共生社会への取り組みにどうフィットしていくかがだいじ。まだ皆さんの中では、高齢、子どもの貧困の対策というところが主眼ですが、やはり障がいの方も入り込んで、地域の一員として、障がいの方が役割をもって入り込んでいくことができるのか、行政でも、施設の方とも連携しながら、どこかモデル的にもちょっと入り込めるところがあればそういう狙いをもっていきたいですね。

○橋本部長 運営はボランティアでしょうか。

○江連委員 ボランティアです。

○酒井委員 私たちの法人でも運営していますが、それぞれの運営の特色が出てしまいかないと思います。児童系の法人であれば幼児向けですし、私たちのこども食堂では障がいの方にもオープンにしているのですが、表だって来るわけではない。児童と高齢が中心で、積極的に取り組み作らないと簡単には足が延ばせないとは思いますが。

○橋本部長 ありがとうございます。あしすとから挙げていただいている内容を説明をお願いします。

○江連委員 あしすとの取り組み、区の取り組み、他職員からの声をお伝えします。

No. 23 No. 24 オープンイブニング、4 t h プレイスの部分です。雇用支援室の登録1600名のうち、就労している方900名位の方います。月1回の夜間開室では、知的障がい中心20名参加されています。その中で情報交換や食事会をしています。4 t h は発達障がいや高次脳機能障がいを対象に、年間4回、現在10数名

の開催です。はたらく中での報告会等もやっています。

No. 25は興本地域学習センターの情報です。足立区ではオランダとオリパラに関して連携協定を結んで取り組んでいる中での動きです。足立区を7地区にわけて、町会の方やスポーツ推進員が入りながら、グループ毎に地域の特色にあわせた、地域活動を考えたり、また各地域学習センターがありますので、定期的にポッチャやったり、興本であればヨガ講座を定期開催したり、しています。障がいの方が、参加しやすいような活動をやっていきましょうというものです。先日の報告会では、オランダのパラスポーツをやっている方が来られ「動いてみないとほじまらない、できない理由はない、どんどんやってみましょう」と話されていて、地域ごとに、これから、パラリンピックを契機に気運の醸成をしていきます。

博物館等については、無料、割引利用がある中で、障がいの方から利用しているとの声があります、との情報です。

社会福祉協議会に関しては、こちらで、かかわっている利用者さんがボランティアをしたいという事例です。先ほどのオープンニングのメンバーからも、ボランティアしたい地域の中に自分たちが入っていきながら役割を持つことを、皆さんが希望していることもあります。そういった意味合いでも、区民祭、矯正展、舎人のさくら祭りに、あしすとも、Aふらんきの販売ですとか、障がいのブースを作って啓発活動をしています。そういったところで役割を持たせられないかとか考えています。また、あいのわさん、あだちの里さん、バザーやイベントの時期ですので、役割をもって参加できることができれば、また新たな

活動につながるのかなという意見もあります。

No. 30 No. 31 民間カルチャースクールについて、学びナビですとか、区だけでなく、民間の部分が活動しやすい領域もありますので、公民の特色を捉えて動いていく必要があると思っています。

No. 32もオリパラの関係ですが、スポーツの情報提供について、スポーツサービスポイントの拠点づくりの動きがあります。まだ足立区としても明確ではないのですが、今後、こういう部分でどういった窓口を作るのか、どういう情報提供の仕組みを作るのかという課題と感じています。今日、共有した中でも、地域サークル等を一覧にしたものを、支援事業所でも共有していただき、利用者さんに提示できるようなものができるのか、今後、この場でも検討したいですし、取りまとめていければよいかと思っています。

○橋本部長 情報提供いただきありがとうございます。全体としての質問はありますか。

○酒井委員 オリパラの情報もそうですけど、スポーツに関する情報が圧倒的に少ない、ご案内は年数回しかないです。全体としてもよくわかりません。特別支援学校の取り組みはいろいろありますが、卒業生の方から聞くと、それだけ格差があるのだなと感じます。

○橋本部長 ボランティア希望の話もありましたが、私たちもよく聞きます。企業の方にも地域の方、商店の方も希望がありますが、まず、就労支援の仕事があることをはじめて知っていただいて、何かしたいけれど何ができるかはまだわからないし、かかわることで不快にさせるのか心配で、何ができるかわからないという方も多いで

です。余暇は比較的にかわりやすい領域なので、例えば魚屋さんがさかなのはなしをしてくれるとか、つなぐ役割を考えたいと最近考えています。

ボランティアと余暇活動取り組んでいるところはありますか。あだちの里さんはお祭のボランティアなどどうですか。

○岡本委員 ボランティアさんは、地域の方や各事業所の方とかあしすと職員とかもいます。

○橋本部長 かかわりたいという人も多いでしょうか。

○岡本委員 お祭ではありますが、日常的には、とりたててボランティアの掘り起こしはしていません。もっと取り組みをと第三者評価では言われました。取り組みが弱いのではと。

○橋本部長 どういった格差があるか、答えは出ないのですが、企業の方はボランティアをしたい方が多いのですが、なかなか地域に結びつかない。支援者だけで余暇にしても地域活動にしても考えずに、地域全体から、違う視点から考えるのが重要と思いますけれども。学校と地域のつながりはいかがでしょうか。

○杉岡委員 地域とのかかわりを見ると、学齢期は放課後デイ、支援者以外、地域に連れていこうという部分もあるでしょうが、親御さんの支援者ともに地域につなげることもできても、学校卒業後のアフターケアについては、すぐにグループホームに入るとすぐにあるでしょうが、地域支援は家庭にいる場合は、いったん途切れているかとの課題があります。家庭によってですが。

ボランティアのことを考えても、生徒も、オリパラのボランティアを応募するとか、役に立ちたいということでやっていま

す。あとは、自分のことを話す、後輩にも話したいということは、ろう学校の場合は、黙っていてもチャンスがあり、難聴学級の出身の場合は、難聴学級の先生から話にきてよとよばれることもあります。卒業生も地域の講演に呼ばれることもあります。

地域生活の支援がいったん切れるような気がするのが実感です。

○橋本部長 地域生活の支援が、切れ目のタイミングとしては、18歳ですとか、80歳50歳とかですが、切れ目をどうしていくかは、全体としての課題としてもありますよね。切れ目ない支援について朝倉委員はいかがでしょう。

○朝倉委員 卒業後に一般就労する方で在学中放課後デイを使う方は少ないです。放課後デイをつかう方は、卒業後、福祉就労が多いかなと思います。

はたらくという点では、ずれるかもしれないのですが、放課後デイに関しての問題点もありまして、学校が3時半に授業終わって、放課後デイに行くと、親御さんが仕事終わったとき、放課後デイから帰ってきてという形もできますが。卒業後、放課後デイがなくなると、就労移行ですと4時まで、生活介護でははやいところでは、2時までで、3時帰って来る場合もある。今まであった3時から5時どうするの、というところ。親御さんもいろんな工夫をしながらやっているところ。よい知恵は、ときかかれても私共も知恵を出せない。区の人と相談しながら個別にいろんなサービス使っている状況。今は、放課後デイにかわるものを手当てしていく場合もある。

本人というより親御さんのはたき方の部分、通常であると18歳で親の役割を終えて第二の人生という時期から、逆に、卒業

して17時、18時まで働いていたのが働けなくなった、卒業後に親御さんの負担も増える場合もあるようです。

○橋本部部长 地域活動の課題について社協さんはいかがでしょう。

○高橋委員 ボランティアに登録する中で、障がいの方は少ないかとの印象はあります。それほど事例としてはないと感じています。

○橋本部部长 共通した意見としては、個別ニーズがちがう、余暇活動を分類化したときは、スポーツや学びですとか話せる場所が意外に多かったですし、本人の話せる場所の必要性も、機能としてキーワードとなっていきそうです。遊び方によって、よからぬ方になってしまう、価値、判断によってもという課題も共有されました。

私たちとしては、個別ニーズに合わせた情報提供、選択肢の提供なのかなと感じました。酒井氏のおっしゃっていたように、全体像の把握や情報提供ができない歯がゆさをかかえているということが共通点との印象を持ったのですけれど。拠点を作っても、まず、今ある社会資源の、インフォーマル含めた全体像を把握すること、それが余暇に関しては、ありそうでなかったかなとも思うので、ワークとしてはそこにつなげていくのもよいと思いました。今日出ただけでも知らない情報があったので、マッピングしたものを作って行くとよいと思いました。

○酒井委員 障がい者のしおりは、制度が書いてありますが、制度でなくて、余暇・スポーツ・ボランティアの情報冊子があるといいなあとと思います。

○木村委員 参考になるもの、こんな楽しみ方もあるよというものがわかると、自分もやってみようかなと考えられると思いま

す。

○松村委員 就労のセミナーでも、はたらくことのながれを中心にやっていて、オフの部分はストレスコーピングという形で後方いきがちです。でも、働いている時間は限られていて、本当は働いていない時間も多いため、積極的な方はよいとして、その他の人にも、はたらく中でこんなラインナップがありますよとか、はたらく前の段階から理解できるようにやっていくと、自分で広げていけるようになるのではないかと思いますし、就労移行の役割の一つでもあると思います。

○橋本部部长 選択肢が少ないと合っているかわからずに、無理して行って、逆にストレスになってしまう場合もあります。選択肢について、既存のものも洗い出すだけでも価値がありそうだなと思います。

時間としてはあと20分位ありますので他いかがでしょう。

○岡本委員 制度上は、遊びに関するものは、考えてみたら、そういうようなものはあるようでない。利用者によっては、各施設の祭、秋の時期は、イベントがいっぱいあって、渡り歩いて楽しんでいる人も多くいますが。

○橋本部部长 気づかないところで、生き甲斐や、やりがいを感じている方もいますよね。足立区の花火の警備のボランティアを、人生の大イベントにして、仕事以上に楽しみにされている方とか、ピンポイントだなあと思います。ワークでは情報を一元化していく方向性でやっていくとよいと思います。学生さんの方ではどうでしょうか。

○朝倉委員 学校の役割が大きいと思うのは、こういういろんな資料作って行って、情報提供していても、卒業後生徒がそれ

を使おうという気にならないと繋がりません。我々の学校の教育にも余暇の取り組みは、とっても少ないなあと思います。やりたいことが何かないか、と紹介しても、知らない世界に入っていくのは、ハードルが高いです。卒業していきなりにではなくて、学生の時代からきちっと、教えていくだけでなく、そういう世界に実際に連れて行ってみないとだめです。我々は、企業実習は積極的に取り組むのだけど、「こわくないよ、企業はこうだよ」と実際に行ってみて、「自分は、こういう風に仕事できるんだな」と、社会に出ていくのだけれど。こういう遊びについても、ハードルは高く、企業実習のように実際に体験してみても、「思っているよりもハードルは高くないんだよ」、「安心してよいんだよ」と、体験していかないと、卒業していきなりでは難しいです。親御さんがアンテナ立っていない、やって来ていない子たちへは、そういうことを教えていかないと、いざ資料出したとしても食いついてくれない。やはり学校の役割大きいと感じます。

○橋本部会長 体験したことのないことへの漠然とした不安は大きいですね。

○朝倉委員 また、アウトプットということですが、自分の仕事のことを、よくしゃべりたいのですよね。なので学校でいうと、担任がいるとよく来ます。一番、ハードル低いです。でも、学校では6年で異動になりますので、担任が異動すると、今まで来た卒業生も足が遠のいてしまう。あしすとで、こういうことやっていると紹介しても、何人行くか。学校からの参加に関しても、参加しやすいような形にもっていかないと。そしてここを起点にして学生と違う人間とのコミュニティーにつながっていく、起点は学校になるのではと思いま

す。

○杉岡委員 職業科のとき、担当科目は理科ですので、博物館、科学館、夏休みの宿題で、行ってしおり持って帰るようというように出しました。実際に福祉の手帳による割引を受けた経験をしてもらう狙いです。

実体験をする、学生のうちに後ろから押されてでも、実態に触れるのが卒業後につながります。あしすとの活動に関しても、学生のうちに、登録して面談して、話して終わるのでなく、事前にもっと行けている、日常的なきっかけが必要と思っています。

○事務局 あしすとの事業に触れていただきましたので、就労者の集まりのいちばんのきっかけはやはりロコミと感じています。卒業生さんが直接に後輩を誘ってくださるのが一番しっかりつながります。日常的な形でのきっかけ作りですけれども、北区の就労支援センターは特別支援学校のすぐそばという立地にあって、たまりば、就労者の集まりに、学校の先生も参加されていて、卒業生さんが来やすいという状況を聞いています。こういった話を伺って、放課後デイの後の余暇の開拓等の課題ですとか、切れ目に対する対応とか、他の部会含めた検討も必要と感じました。

○橋本部会長 家族の視点からいかがですか。

○金泉委員 イメージすることができない、実際に見てみないと、性格にもよるでしょうが、実際に体験してみないとわからないという課題はあります。

○山口委員 入り口の取り掛かりをだれが作るのかが一番むずかしいと感じています。グループホームであれば、一定程度情報提供できますが。入居する前のバックグ

ラウンドを聞いてみると母子のみで二人で過ごして来たとか、社会との接点がない、母親と子供のみ、という方もいます。障がい福祉サービスを使っていれば、計画相談など、いろんなものが入っているけど、サービスに入る前から、どなたかがキーパーソンになっていることが重要だと思います。孤立というか、こもっているのは親御さんの場合もあります。緊急で虐待の案件などもセンターに連絡入ってきます。そういう場合も、地域の方は、そのご家族がいることを知らない。地域の案件、誰かと社会とのつながり、取り掛かりを、父母ができない、いない場合は、地域の誰かがやっていくことを整備していく必要があると感じます。支援が後手にまわっている気がしますし、進路、かかわり方を構築していく必要があると思います。

○江連委員 ケースワーカーを7年近くやって来ました。ケースワーカーは事務職が多いです。福祉職も多少いますが。ハチマルゴーマルのケースについて、お子さんが知的障がい、ほぼどこにもつながっていない、という状況の世帯もあります。障がいや社会資源について、ケースワーカーの知識が不十分な場合もありますので、しっかり知識つけていくことが大切と感じています。何割が生活保護かはわかりませんが、ケースワーカーがグループホームだとか、何かの活動に参加するのかとか、家をどうするのかとか、ケースワーカーが繋ぐ糸口になっていければと思います。

○橋本部長 企業の相談も、加齢に伴う生活支援について、福祉サービスを全く利用していなかった方についての相談もあります。前回ははたらく部会では、企業、就労そのもののテーマで、次回につないでいくにあたっては、今回は、余暇活動につい

て、いろんな意見がありましたし、余暇につなげていくことが難しい状況も共有されました。一つ出たところとしては、全体像、情報提供しやすいツールの必要性が明らかになりました。前回は企業の理解、企業の好事例の話。今回は余暇活動の話。今回はこれまでのテーマについてもう少し整理したものを踏まえ、議論を中心にやっていきたいと思います。今回はこれで終了します。